オニシバリではその分布北限近くや中部山地にあるものにこの例が多い。チョウセンナニワヅはオニシバリのこのような型のもので中井先生手記のその標本には普通のオニシバリ型のものもある。

これらは恐らくすべて雌雄異株で，雄花が大きく雌花が小さい。雌花は萼筒が短い割に子房が大きいので開花時殆ど常に下部雄蕊に柱頭が接する。レブンナニワヅはナニワヅの雌株に基き記載されたものと思う。

更に萼片と萼筒の長さの比が種によつて異る。オニシバリは 1/2～1 で 1/2 に近く，ナニワヅは 1/2～1 で 1 に近い。カムチヤツカナニワヅは 1/3～1/2 で，これのみは又上部雄蕊も全く萼筒内（3/4 の高さ）にかくれる。

最後にオニシバリとナニワヅ・カムチャッカナニワヅを分つ重要な区別点は葉の側脈の形である。第1図に示す如く，前者は葉の基部寄りのものが発達悪く不規則に曲折するが，後二者ではよく発達しスムーズにのびる。チョウセンナニワヅは一見中間的であるが，オニシバリに近いといえる。

従つてオニシバリ，ナニワヅ，カムチャッカナニワヅ（又はカラフトナニワヅ）の3種を認めることができる。

○チシマオドリコ（久内清孝）Kiyotaka Hisauchi: *Galeopsis bifida*

イタチジソまたキバナノクルマバナの名で知られている *Galeopsis bifida* Boenninghausen はだいたい中部の北部から北方で採集されていて，日光などでは早くから知られていて当然日本のフロラに仲間入りをしているが，最近これが千葉県津田沼町旧兵舎あとに出てきた。この場合この草は本来日本にあつたものに原因せず，原氏の日本種子植物集覧にもあるように本来のものとは別に外来したものと思う。そこで考えなければならないことは，フロラを扱う場合である。この草ばかりでなく外にも従来から日本にあつたが，近年入つたものもあることである。津田沼の場合の如きは明かに外来品である。そうしてこの草は米国でも外来品として扱われているところから見ると，どうも世界をまたにかけているらしい。津田沼のはニワトリの飼料に混じて来たらしく，これと共にノムラサキが混つていたところから判断してこの草の故郷が推定できる。一応記録しておく。尤もこれが果して *G. bifida* であるか *G. tetrahit* との雑種であるか私にはわからない。

□春山行夫：**花の文化史**　新書版 205 頁　中央公論社，昭和 29 年 12 月発行　サフラン，スイセン，三色スミレ，ハギなど 16 項の栽培，渡来，故事，逸話などを記した読物。行文流暢，面白いが，植物学的な誤り若干。￥120 (F. M.)

□石井勇義：**園芸大辞典**第5巻 470 頁　誠文堂新光社，昭和30年1月発行，項目ひ―も，内容充実，あと1巻で完結が待たれる。￥1000 (F. M.)